

---

# SKY-JOE story

hms

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

S K Y - J O E   s t o r y

### 【Nコード】

N 6 5 8 7 W

### 【作者名】

h m s

### 【あらすじ】

超高性能ジェット戦闘ヘリ“マッドサンダー”を操る。スカイ・  
ジヨ の物語！！

## プロローグ（前書き）

超高性能ジェット戦闘ヘリ“マッドサンダー”を操る。スカイ・ジ  
ヨ  
の物語！！

## プロローグ

広大な宇宙空間のなか　その星は、  
地球と同じ質量、大気、自転数で  
我々の遺伝子と寸分かわらぬ人類が、高度な文明を営んでいた。  
同じ時間軸上に存在するか否かは不明である。

彼ら人類には、“国家”という概念が存在せず、“国家”の代わりに企業が世界を統率していた。  
人々は各々に利益をもたらしてくれる企業に属し、自由に雇用先を替えることが出来た。  
企業に所属できない者は　企業の本社支社などの”シティ”の周辺にスラムを作り  
低レベルの”ソルジャー（傭兵）”の仕事に参加できる順番を待っていた。

産業が発達し企業の発足当時から  
企業間の戦火が絶えることなく  
歴史は人々の血によって築きあげられてきた。

この星の暦　A D 2 0 5 1 年  
先進をいくIT企業”コ・モンラム”が  
画期的CPU”REGIUS”<sup>レジウス</sup>を開発

これを期に世界は大きくゆれ戦況はさらに拡大し  
各企業に、莫大な被害（損害）と、莫大な利益（生産）を与えた。  
戦火の拡大により、商品の消耗率が上がり需要が爆発的に高騰して

いったのであった。

CPU” REGIUS” 自体は日々進化し、生活産業、軍事、開発、  
．．．．

それぞれの分野でとても欠かせない物となり

”コ・モンランム”は爆発的な成長を遂げ

幾つもの企業が”コ・モンランム”に吸収もしくは占領され

”コ・モンランム”は世界の頂点に君臨した。

そしてAD2098年　．．．．．

## Chapter 1 未来錯誤 01 ジョー・クレンナ

### 01 ジョークレンナ

惑星一の大陸“ネポアル”

そのほぼ中心に”コ・モンランム”の本社は巨大な都市を形成していた。

5000m級の独立峯“キールマムジュール山”山頂から軌道エレベーターが衛星軌道上まで伸びており

その山肌に沿って建てられた超巨大な建造物を中心に

放射線状に広がる都市の直径は160kmに及んでいた。

軌道エレベーターが巨大な都市の勇姿に花を添えていることから

宇宙開発の産業も積極的に行われていることが伺える。

”首都レジアス（王）シティ”コ・モンランム最大のヒット商品と同じ名前である。

軌道エレベーターのある中心から35km80Km地点に環状鉄道と環状高速道路が走っており

東西南北さらにその中間8箇所、計16か所に

都市内輪、外郭警備を担う、モンランム軍の巨大ベースが点在していることから。

別名”鉄壁レジアス”とも呼ばれている。

各ベースには陸空軍が常駐されており、内輪のベースは都市の防衛警備、

外郭のベースは都市の防衛、軍事戦略の拠点になっている。。

都市の東方外郭に位置する”ヘリオス・ベース”

都市の中心部では、雨が降っているもようだが

この基地の周辺は青空に囲まれていた。

陸軍所属の歩兵部隊を輸送するヘリが、15台の対地用装備を施した戦闘ヘリを護衛にともない

ヘリオスベースより飛び立っていく

大型ローターを上部に2機かまえた輸送ヘリは、そのおおきな陰を地表に落とし速度を上げていった。

その下の砂漠に延びるレジアス放射状3号線へつながる道をその下一台の大型トレーラーが走っていた。

大型トレーラーはヘリオスベースの手前でいったん停車すると、入門の審査をクリアして基地の中に入っていた。

運転席の後ろにキャンピングルームを兼ね備え荷台に巨大なカーゴルームを施した全長25mのトレーラーを運転しているのは10代半ばの栗色の長い髪の美しい少女であった。

少し小柄な彼女がツナギ姿でこの大きなトレーラーを運転しているのはとても不思議な光景であった。

「お父さん、パスしたわよ、もうすぐセンターにつくから」と、キャンピングルームに向かって話しかけた。

奥からは、・・・返事がない、毎度のことのようにだ。

少女は返事の催促をしたりはしなかった。

ルーム内で、お父さんと呼ばれた男が、TV電話で誰かと会話をしていた。

「いやゝ、もったいないもったいない、

何度も言うようだがね。君ほどの男とそのマシンがあれば、

モンランム軍専属料をはるかにしのぐ報酬をどこでも払ってくれるんだ。

いやゝ、もったいないなゝ、そうは思わんか？、ジョー？」

“ジョー” 栗色の長い髪の美しい少女がお父さんと呼んだ男の名前だ。

「こちらは何度も言ってる。金には不自由してない  
よしみで話は聞いているがオズ、お前でなければ、・・・」

「そうそう、この敏腕ブローモーターの俺でなければこんな話もつ  
てこれないって」

TV画面の面長で両の目が少し釣りあがった男、

オズがジョーの言葉に割り込んだ

「幾つの会社から依頼が来るとおもう？、数え切れないぜ」

「みんな、お前を、雇いたがってる。大きいところからいくと、ギ  
デオン重工、フジ工業、ロッキード重機、ラフラックス重工、ハヤ  
ブサCOM、メンタル、ハイソーサー、プーレスト、ピュアアイランド  
、ははははは、」

オズが言葉の最後で鼻で笑い、皮肉っぽくこう付け加えた。

「みんな“モンライム”と、やりあってるやつばかりじゃね〜か〜」

「ピュアアイランドなんて聞いたことないぞ」とジョーが口を開く

「うぬ、確かに聞き覚えはないが依頼が来てるから・・・、あ〜  
どこかの子会社かもしれないね〜が」

オズが首をかしげながら手元のノートパソコンをのぞきこんだ。

「こいつあ〜、驚いた、ピュアアイランドって会社、交渉に応じな  
ければジョーの首に賞金を掛けるとよ。」

「なに様だ〜こいつは、期限まで切つてきやがってる。」

「お父さん、センター」

運転席から声がした。

トレーラーがヘリオス基地の中心部、管理管制センターについたよ  
うだ。



「悪いオズ、お前の冗談はいつも楽しいよ、用事だ、またな！」

「あゝ、しばらくわしもレジアスでうるちよろしている、用があったら声をかけて・・・！」プツッ

オズの会話の途中でジョーは回線を切り、立ち上がった。

ロマンスグレーのオールバック、口髭、視線を他人に感じ取られないように掛けたサングラス

ジョーの風貌はまさにダンディーのオンパレードだ。

「クレア、留守番だ！ “マッドサンダー” の調整を頼む」

栗色の長い髪の美しい少女はジョーの娘でクレアという名である。

「エー、基地についたら買い物に行っていって言ったじゃない。」

返事もなく、ジョーは外に出て行った

クレアは、毎度のことと飽きれていた。

「返事くらいしなさいよ、もう」

反論もむなしかった。

先ほどまでジョーがオズと電話で会話していた部屋で電話が鳴った。クレアは腹を立てているのか電話を無視している。

やがて電話が留守録に切り替わった。

TV電話のモニターに、めがねを掛けた細身の中年男性が映し出された。

モニターの左下側で”REC”マークが点滅しだすと男は話始めた。

「久しぶりだなジョー、ウォーレンだ。」

“ウォーレン・ギルモン”とモニターの下に相手の名称と電話アドレスが表示されている。

「少し、相談に乗ってもらいたいことがあって連絡したのだが、・・・

レジラスにくることがあつたら、キルメス研究所によってくれないか？

・・・」

聞き耳をたてていたクレアだったが

急ぎの用事ではなさそうなので、父親の命令を無視して買い物に

出かけることにした。

ヘリオスベースの周りにはショッピングで有名なモール街が数多く軒を並べている

多分、そう長くはないであろう滞在時間に、父親の言いつけを守れる余裕など

クレアにはなかった。

ツナギから薄でのブラウスに着替え軽く化粧を済ませると、

トレーラー運転席後部のハッチから取り出した電気スクーターにまたがって

トレーラーが入ってきた道路と反対方向へ猛スピードで消えていった。

ジョーの大型トレーラーの両横には

各々の自慢の武器を携えて、ヘリオスベースに就職活動にきた、傭兵達の

何台もの大型トレーラーがずらりと並んでいた。

ソルジャー

傭兵の種類にも色々あり

企業の専属になる者

作戦ごとに報酬を受取る者、

管理管制センター前に並んだトレーラーの持ち主達のように

自前の武器持参で高額報酬を受け取る物

体のみの参加で、生活の糧程の報酬を得るもの

各々が資産レベルによって

戦場規模、報酬を選び、企業側の審査が行われ  
それをパスすると雇用契約が結ばれるのであった。

## Chapter 1 未来錯誤 02 前戦

### 02 前線

バタバタとプロペラの轟音が  
決して小さくはない“ソルジャー（傭兵）”達の声を掻き消していた。

歩兵部隊輸送ヘリが、ヘリオスベースから出勤してすでに3時間が経過していた。

岩肌がごつごつとむき出しの荒野から、緑豊かな森林地帯に地上の景色は変わっていった。

「こちら、ドラフトキング、まもなく、タッチダウンポイントだ。」  
輸送ヘリ”ドラフトキング（作戦コードネーム）”のパイロットがヘルメットから突き出ている  
ヘッドマイクに向かいそう告げた。

「オメガ01から04、オメガリーダー含む4機が先行する。」  
護衛の戦闘ヘリからの無線連絡と同時に

4機のヘリがスピードを上げ輸送ヘリの前方へ、遠ざかって行った。

オメガ隊を構成する戦闘ヘリは、

機種下方に単芯のガトリンクガンを標準装備、単座式コクピット、  
一基のジェットエンジンをプロペラシャフト後方に備え

コクピット側面から張り出した両翼には、各種爆雷、ミサイルポツ  
ド、

サイドワインダーなどがオプション装備できる。

20年ほど前にコ・モンランム社の傘下にはいった。

ブラウニー重工業社製の”ブラウニー32式FH戦闘ヘリ”で編成されていた。

装備しだいであらゆるタイプの戦闘が可能で

小型で小回りの効く、生産コストを押さえた万能型ヘリである。

ドラフトキングと呼ばれる輸送ヘリも

ブラウニー重工業社製”ビッグベアー102式SYH輸送ヘリ”

機種前方にコクピットをかまえコクピット下部に唯一機関銃の装備がほどこされている

上部に2連のローターを備え、後部大型ハッチ内の格納庫には、小型の装甲車も搭載できる。

おもに兵員や陸戦部隊の輸送に主力配備されていた。

「オメガリーダー及び、02・03・04はT3ポイント通過後、3キロ先で警戒に当たれ！」

「05は、ドラフトキングの前衛警戒を

06以下の残りの各機は周囲を左右展開、各自上空を確保しつつ警戒に当たれ」

ビッグベアー102輸送ヘリの格納庫で、隊長らしき男が、

30人の歩兵部隊に作戦の最後の支持を与えていた

30人の歩兵は、3班で各10名

各々リーダー1名、アシストリーダー1名計6名が、コ・モンランム社の専属ソルジャーであり

残りはすべて、スラムの低レベルソルジャーで構成されていた。

「いいか、最終確認だ。タッチダウンポイントに本機着陸後

アルバート班、ノエル班、キース班の順にタッチダウンポイントから、散解しろ

本機力が着陸して、離陸するまでの時間は1分30秒

タイムオーバーのやつは俺が突き落としてやる！」

タッチダウンの間、敵の攻撃がなければ

全員、降機後、本機及びオメガ隊とも即この場を離脱する  
タッチダウン中、もしくはそれ以前に攻撃を受けた場合  
本機は貴様等を棄てた後すぐに離脱するが

オメガ隊は貴様らが姿をくりますまで、援護する。

第一警戒ライン通過、先遣部隊と合流前にフラックス軍との交戦は  
出来る限り回避しろ、

ターゲットポイントの制圧完了時に、貴様らの口座にボーナスクレ  
ジットが振りこまれる

各自、装備確認！」

30人各々の兵士が自動小銃、防弾ジャケットなどの装備を確認する  
ヘルメットの左目上部分の、可動式ナイトスコープ謙サーモスコ  
ープをチェックする者や

防弾ジャケットに取付可能な、弾薬、手榴弾、数をチェックする者

ズドン！！！！

突然、爆発音が鳴り響き、ビッグベアー102輸送ヘリが大きく揺  
れた

格納庫に警報が鳴り室内が真っ赤な警戒ランプで照らされた  
ビッグベアー102の左翼に展開していたオメガ隊の戦闘ヘリ07が  
火の塊となって墜落していった。

「オメガ07対空ミサイルによって被弾撃墜された。」

「ドリフトキング高度をあげる、狙いうちされる。」

速度の遅いビッグベアー102は真っ先に対空砲火の餌食になりえる  
オメガリーダーからの指示でビッグベアー102輸送ヘリは上昇体  
勢に移った。

森林の間からオメガ07を撃破したミサイルの発射痕煙が、尾を引  
いていた。

オメガ06が煙の根元に向け対地ミサイルを威嚇発射した。

と同時に、森林の各所から地对空砲の砲弾がいつせいに発射されビッグベアー102とオメガ部隊を掃射した。

ビッグベアー102に何発かの砲弾が命中したが、数が少なかったため致命傷になるほどではなかった。

身の軽いオメガ隊は軽く掃射をかわし、対地攻撃を開始した。

機体重量の重いビッグベアー102には、この弾膜網を抜けることは難しかった。

弾丸が鉄の表面に叩きつけられる音が鳴り響き機銃の掃射を受け続けていた。

「放火が、激しすぎる。回避は不可能だ。タッチダウンポイントを変更する。」

9時の方向に“ステージ（着陸可能地点）”がある。「パイロットがそう叫んだ。」

左翼を見据えたパイロットの目の先に森林間沼地があった。

「オメガ隊、タッチダウンポイントを左翼沼地に変更する。援護を頼む」

オメガ隊の返事が返らぬうちにビッグベアー102は大きく機体を傾かせ左旋回を始め下降しだした。

機体右側に、何発も被弾するも、機能部に損傷はなくホバーリング体制に移った。

高度の下がったビッグベアー102を補足したフラックス軍のハンター（AIを備えプログラムによって動く無人のロボット兵器）が、森林の木々の間から沼地にとび出してきた。

少し立ち止まると上空を見上げロケットランチャーを放った。

近距離から打ち放たれたロケット弾はドラフトキングの機体をかすめ前部ローターにからんで爆発した。

ドドドドーン！！！！

致命傷である。もはや高度や姿勢を維持することは出来なかった。

「まずい」オメガ15の機体がロケットランチャーを放ったハンター目掛け

ガトリンク砲を掃射する。

ハンターのはばらばらに砕け散り、沼地にオイルや破片が飛び散った。

前部ローターを破壊されバランスを失くしたビッグベアー102が機体を大きく回転させながら沼地に墜落した。

沼地の水が大きく飛び散り、ドラフトキング墜落の衝撃をつつみこむ。

水しぶきの中に美しく虹があらわれた。

「オメガリーダー、こちらオメガ09 ハンターが多数森林内にいる模様、

電磁パルスナパームを投下ます。」

「致し方ない、許可する。派手な戦闘は避けたかったが

このままではドラフトキングのソルジャーがなぶり殺しにされる。」

オメガ09が対空砲火をかくぐり、墜落したビッグベアー102からある程度距離をおくと

木々の間に電磁パルスナパーム弾を投下した。

高々と落下地点から火柱が上がると周辺の森林が火炎に包まれた。

フラックス軍のハンターは燃え盛る火炎に包まれる中、

電磁パルスによって一時的に機能を停止していった。

動かなくなった火の中のハンターを、オメガ隊が上空から狙撃していった。

頭を手で押さえながら、ドラフトキングの指揮管が傾いた機体の中で



立ち上がった。

「炎が収まったら。総員本機を離脱  
俺と本機乗員はキース班と同行する。」

とコクピットにつながるマイクを取るが、

少し耳に当てた後マイクを床にたたきつけた。

パイロットはすでに息絶えていた。

沼地を取り巻く森林が焦土と化し、

電磁パルス歩兵達は勢いなく森林地帯に降り立った。

墜落の衝撃で、もうろうとしている者がほとんどであった。

オメガ隊は機能障害で一時的に停止しているハンターを殲滅し変更  
されたタッチダウンポイントの安全を確認すると

ヘリオスベースへの岐路についた。

ビッグベアー102の歩兵達は、ゆっくりと夜の近づいた森林へと  
足を踏み入れていった。

## Chapter 1 未来錯誤 03 マッド・サンダー

03 マッド・サンダー

8インチ程の小さなモニターに映し出されたのは  
ヘリオスベース滑走路の管制官であった。

「モンランム専属特Aソルジャー、ジョー・クレンナ

登録形式ソ・リアテック77式BHV T-01戦闘ヘリ、コード名  
称“マッド・サンダー”

発進の許可をする。」

「了解、オールグリーンだ。」

重量感のあるパイロットヘルメットをかぶり、パイロットスーツに  
身を包んだジョーが

マッドサンダーと呼ばれた戦闘ヘリのコックピットから管制官に向  
かい口を切った。

「ターゲットポイントの、データ送信を頼む、」

マッドサンダーのメインローターがゆっくりと回転し始めた。

メインローターの回転数が上がってくると共に

テールローターも回転を始め、空気を切裂く音がしだいと大きくな  
っていった。

「本出動は特別許可になり、貴方が作戦に参加することによって  
得られるクレジットは0です。」管制官が冷徹にいった。

「百も承知だ。」

ジョーが答える。

「武器弾薬の燃料等の消費も自己負担になります。お忘れなく、」

少し間をおいて、表情を和らげた管制官が

「本作戦に参加する理由をお聞きしてもよろしいでしょうか？」

「野暮用だ！」

と吐き捨てるようにジョーが返事を返した。

「発進するー！」

それ以上管制官に質問させまいと、スロットレバーを一揆にあげジョーはマッドサンダーの機体を上昇させた。

ブラウニー戦闘ヘリが数十機並ぶ発着デッキから

マッドサンダーは対地用の重装備を施し夜の空に飛び立った。

待機中のブラウニー戦闘ヘリを照らしていたスポットライトが

マッドサンダーの方に向きを変え照らし出し

発進を見送った。

マッドサンダーのコックピットにターゲットポイントの地理情報が送られてくると、

ジョーはスロットル脇のキーボードをカタカタとはじきコンピューターに入力を済ませた。

やがて基地管制塔のスポットライトが届かなくなり。

マッドサンダーのヘッドライトと、識別灯が暗闇の夜空に浮かんた。

ソ・リアテック77式BHVT-01戦闘ヘリ、コード名称“マッド・サンダー”は

ソ・リアテック社の研究機関で、特殊オーダーにより開発された。モンランム社の“レジラス・ウルティマ・トライセルプロセッサ”（モンランム社外非売品で社内でも管理者クラスでしか仕様できない）を

それを制御コンピューターに搭載した世界でたった一機（生産コス

トが非常に高価なため）の重装備可能な多目的戦略ヘリである。

縦列複座式、機種下方に機種前面に取り付けられたカメラと照準機で適格に目標物にヒットする3連砲身回転式40mmガトリンクガンを装備、

砲後方にガトリンクガン弾3万弾ストック庫を備え付可能

コックピット前席両脇下部とコックピット後席後方両脇に可動式ジェットエンジンを計4機搭載、長距離の高速移動が可能で、ジェットエンジンの可動により恐ろしく急激な小回りも実現

前部ジェットエンジンの給気口上部ら、棒状の特殊ソナーが前方に向けて張り出し、索敵能力に丈けている。

コックピット後席側面から張り出した両翼には各種ミサイル。爆雷。ミサイルポッド。長距離遠征用の予備燃料タンクなどが装備でき、両翼端には各種サイドワインダーを3機、計6機搭載

後部可動ジェットエンジンのカバー部にグレネード弾などを装備可能  
本体からテールローターまでの尾翼の下部に、後方かく乱用のブイと後方迎撃用の小型ミサイルを発射できるシャフト口が二つ

メインローターの羽は5枚と高馬力

テールローターは鋼鉄製のカバーに囲まれ

機体下部には。ラウンドモービルなど運搬用のアームが収納されている。

着陸時に必要な車輪3つは滞空時は収納可能

同クラスの戦闘ヘリではマッドサnderの戦闘能力を上回る物はありえないといえよう

戦場では、ジョーの操縦テクニックとあいまって文字通り“狂雷”とかす。

狂雷は、おとなしく闇夜の空を東へ向かった。

「シンクロ率、拒絶反応を確認します。」

何処かのモニタールームの一室で声がした。

「サテライト1 + 4 9 . 2 - 4 9 . 2 + 4 3 . 8 - 5 2 . 1  
サテライト2 + 4 9 . 1 - 4 9 . 6 + 4 3 . 9 - 5 2 . 9  
サテライト3 + 4 8 . 1 - 4 9 . 3 + 4 4 . 9 - 5 1 . 1  
サテライト4 + 4 9 . 1 - 4 9 . 9 + 4 6 . 9 - 5 3 . 1  
サテライト5 + 4 9 . 1 - 4 9 . 9 + 6 0 . 9 - 5 9 . 1  
サテライト6 + 4 8 . 4 - 4 8 . 2 + 5 9 . 9 - 4 9 . 1  
サテライト7 + 4 8 . 6 - 4 9 . 2 + 5 3 . 9 - 4 9 . 8  
サテライト8 + 3 . 5 - 6 9 . 8 + 8 3 . 9 - 0 . 2 3  
全て拒絶反応0でオールクリア」

「サテライト8のみ、 に動きが見られません！」  
「検体の、脳活動に見られる異常な状態が依然継続されています。」  
「穴埋めするかのように の動きが活発になって動作、シンク口補  
てんしているようにも見られます。」

モニターの明かりに照らされた薄暗い部屋の中で研究者達の声だけが響き渡っていた。

## Chapter 1 未来錯誤 04 第一警戒ライン

### 04 第一警戒ライン

夜の闇が、森林を覆っていた。

暗闇に一瞬閃光がきらめき、何秒かおくれて轟音が鳴り響いた。  
と、同時に、東方の林間から銃弾の熱を帯び発光した多数の弾導が、  
猛烈な勢いで

西方の森林にめがけはなたれた。

・・・また、爆音が夜の闇の森林に鳴り響いた。  
西方の森林に着弾した銃弾が目的物を破壊し続けた。

「はあ、はあ、はああ、はあ」

闇の中から、必死に高まった鼓動を抑えようとする幾つもの吐息が  
木々の間から発せられていた。

爆発がどこかで起こり、その閃光が  
地を這い、息を殺し自動小銃を構える何人かの兵士を照らした。

ドラフトキングで森林に降り立ったアルバート班の隊員達であった。

すさまじい爆発音が鳴り響き続き、繰り返された。

隊員達は、爆発の勢いが鎮静化するのを、

ただただ、身を伏せて待つしかない状態に置かれていた。

アシスタントリーダーのモルフィスが、囁き声で舌をうった。

「くそつ、第一警戒ラインまでもう少しなのに、」

スタン、狐目の傭兵がつぶやいた。

「先方もラインを、越されるとやばいってことさ、」

「いや、警戒ライン内輪にハンター（AIを備えプログラムによって動く無人のロボット兵器）や陸戦警備部隊は特に配備されていないはずだ

第一警戒ラインで、誰かがどじを踏んだ可能性がある。」

スタンの言葉を、190cm長身のハンスが冷徹に否定した。

フラックス社軍タピオンベース、

レジアスシティに一番近い“コ・モンランム”と対立する“フラックス社”の軍事戦略基地

中心から半径10キロメートルの

円周上に第一警戒ラインは設置されていた。

前後200メートル木々は一切生えておらず。

有視確認できない赤外線ビームが50cm感覚で碁盤の目のごとくはるか上空まで

高度10000mの地点で地面と平行してはりめぐらされていた。

ビーム内には進入物を感知するセンサービームと

精密機器、電子機器を、一時混乱させるパルスビームが混在しており侵入の際これに触れた兵器、電子機器は機能障害を起こし一時コントロール不能に陥る

その瞬間をねらって、

ライン内森林部に設けられた自動砲台、自動ミサイル発射台などによって

センサービーム感知地点を攻撃し動体感知が終了するまで攻撃を繰

り返す。

また上空高度10000mの網状ビームには、電磁分解派などが含まれており

衛星軌道上からの詳細な地上情報が読み取れなくなっていたり、レーザー攻撃などのレーザー粒子などの熱源を拡散させる役割が備わっていた。

レーザービーム発信源はタピオンベース付近のコントロール施設にあり

この目に見えぬ障壁を兵器、もしくは乗り物、あらゆる電子機器によって通過することはほとんど不可能であった。

おそらく歩兵だけが50cmの間隔の網目を通り抜けることが可能で、

ヘリオスベースからタピオンベース調査攻略のための派遣は日々繰り返され

慢性化していた。

何発もの流れ弾や砲弾が闇の森林に光を与え  
アルバート班が身を隠す近辺に飛来し続けた。

うずくまったモルフィスが、

動体感知及び識別信号などを感知する機器を右手に持ち覗きながら  
「ノエル班の識別信号が消えていく、」

「やっぱりどじを踏みやがった。

早く全滅しやがれ、こつちまでもたねえ」

ハンスが砂煙に巻かれながらしかめっ面でそう唸った。

うずくまる中、一人の男が胸から零れ落ちたペンダントを握り締め



爆発の閃光で、ペンダントの刻印文字を見つめていた。

『FOR ロブ・キンスキン』

FROM レイチェル・フローズン』

男女の人名のようだが、何度見ても男はこの名前に聞き覚えもなく記憶にも残っていなかった。

それどころか、なぜこのペンダントを所持しているのかもわからなかったのだ。

「ノーバディー大丈夫か？」

その男の名前であった。

「ああ、大丈夫だ、バーキン、」

ヘルメットを深々とかぶりゴーグルをはめ防塵用にマスクで口を覆っていたノーバディーがバーキンに答えた。

流れ弾の勢いはさらに激しさを増し……………  
やがて収まった。

「ノエル班の反応0です。」

モルフィスがそういうとゆっくり隊員達は立ち上がった。

隊員達は少し前進することにした。

ハンス、BDという名の傭兵二人が大きな対戦車無反動機銃をかまえ先頭にたち

木々に見を隠しながら

左応右応しながら、隊員達は第一警戒ラインの座標にまでたどり着いた。

辺りは煙が立ち上り激しい爆発の跡があり、  
ばらばらに散らばったノエル班の装備や隊員達の体の一部が転がっ

ていた。

「ざまゝねゝなゝ」

モルフィスはそういうと、ヘルメットのスコープを下ろしナイトモードから赤外線探知モードに感知度を切り替えた。

目の前に広がった赤外線センサービームは碁盤の目のように左右上空にまで限りなく広がっていた。

その間隔は50cm四方で、人がなんとか通過できる大きさであった。

「ヒュゝゝ」

風を吹くような音にならない口笛でモルフィスはその光景を賛美した。

「敵ながら、天晴れだぜ」

全員がスコープをおろし、赤外線探知モードに切り替える。

「まず、大型銃器や荷物を投げ入れろ」

アルバートの指示で隊員達は装備品を体からはずし、センサーの内側へ投げ入れた。

「一人づつ、前後がサポートして通過しろ、ビームに絡んだら、命はないぞ」

アルバートが冷徹な声でみなに注意を促した。

一人づつ慎重に、通過作業を繰り返した。

センサーを全員通過が完了すると隊員達はどつとその作業に疲労を感じ

次の、行動に移るべく気持ちを切り替えた歩きだした。

傭兵のギルだけはライン付近に残り何か仕掛けを設置していた。残りの隊員は警戒態勢をとりながらゆっくりと歩き続け、再び森林の中に足を踏み入れていた。作業を済ませたギルがその後を追った。

闇夜を低空飛行で東進するマッドサンダー

「アルバート班、キース班、第一警戒ライン通過」

モニターの下部に表示された。

「少し、のんびりしすぎたな」とつぶやき

ジョーはマッドサンダーのジェットエンジンすべてのスロットルを上げた。

すさまじい吸引音がジェットエンジンの吸気口から巻き起こると同時に

マッドサンダーは爆発的に加速した。

ジョーはすさまじい加速Gに耐えながら

キーボードを操作し、フラックス軍 タピオンベース第一警戒ライン情報の整理を始めた。

タピオンベース詳細がモニターに映し出される。

隣接してミサイル工場と、人口三万人ほどの小さなシティがあり半径10キロ四方を第一警戒ライン、5キロ四方で第二警戒ライン第一警戒ラインにはコンプリートレベルの難易度MAXが表示された。

次にマッドサンダーが第一警戒ラインのパルスレーザー通過時に受ける機能障害度をシュミレートしてみる。

飛行駆動系メインローター、テールローター、ジェットエンジン、オールダウン

感知系、オールダウン

銃火器系、オールダウン、その他諸々、オールダウン

コントロールPC系、オールダウン、手動操作により再起動

起動後機能障害残留率98%、PC障害修復タイム75秒

PC完全復旧後

全システム自然復旧タイム3600秒    PCサポート復旧タイム599秒

「マッドサンダーといえど、第一警戒ラインをまともに通過したら、ただの鉄の塊になるってことか」  
ジョーは頭をひねっていた。

## Chapter 1 未来錯誤 05 タピオンベース

### 05 タピオンベース

けたたましいサイレンが  
フラックス軍タピオンベースに鳴り響いた

基地の様々の明かりで夜の森林の海の中にぽっかりと浮いた島のように見える。

「敵機来襲、敵機来襲！」

「亜音速で東方より接近、味方、同盟軍の発する友軍識別信号確認取れません。」

「飛来飛行体、機数不明、確認中！」

防御体制へのシフト動作のため基地管制塔内があわただしく人がいきかいた。

司令官らしき男の一步後ろで参謀長が口を開いた。

「第一警戒ラインシステムの、哨戒行動かとおもわれますが？」

司令官が大きく映し出された正面レーダーモニターを見上げ

「VTOL、FH-067、3機スクランブル、第一警戒ライン内で待機させる、」

垂直離着陸ジェット戦闘機“フジ工芸社のFH-067EX VTOLマーカス”の発進を促した。

タピオンベースの第一警戒ラインは難攻不落で越えて生きて帰った者はいなかった。

VTOLマーカス3機はマニュアルどおりの出動で

領空接近者に対しての威嚇行動が目的であった。

格納庫内から出てきたVTOLマーカス3機は、滑走路に出るとその垂直上昇機能を使わず、長い滑走路を利用して飛び立っていた。

「侵入機、識別」

司令官席より一段下がった。オペレート席から声が上がった。

「ソ・リアテック77式BHVT・・・」

そこまで告げてオペレーターが言葉を詰まらせた。

「どうした？」

司令官が言葉を詰まらせた意味を問いつめた。

「すいません、ソ・リアテック77式BHVT-01戦闘ヘリ」とオペレーターの続きの解説に

「ヘリ？ジェット機並みのスピードではないか？」

司令官が疑心の目でオペレーターに問いかけた。

「間違いありません、・・・コード名称マッドサンダーです。」  
ヘリであることと、誰もが知っているコード名称をオペレーターは言い放った。

司令官がオペレーターを睨みつけ

「なに、マッドサンダー（狂雷）??」  
と叫んだ。

一瞬管制塔内でざわめきが起こった。

「あの、ジョーがきたというのか？……  
……スカイ・ジョーが？」  
管制室内で誰かが叫んだ。

“スカイ・ジョー”

マッドサンダーに搭乗するジョー・クレンナに付いたニックネームであった。

ジョーが、あらわれると雷が落ちる、狂った雷が

ジョーが通り過ぎるとそこには、何もなくなり、空になる。  
空になる。なにもない空に……SKY……

VTO L垂直離着陸ジェット戦闘機3機といえどスカイ・ジョーの敵ではない、

あっけなくやられてしまうに違いはない、誰もがそうおもっている。

「僚機は、ありません。単独です。」

オペレーターはそう促すが

マッドサンダー単独一機だろうとそれは、同じことであった。誰も  
がそれを分かっていた。

「VTO Lマークスを、10機追加発進させろ！」

先ほど出撃した3機は第一警戒ライン手前で待機！」

司令官があわてて追加出撃を促す。

参謀長がそれに対して意見をする。

「“コ・モンラム”の重大軍事作戦にスカイ・ジョーが極秘投入  
されると必ず大勝利を導いています。

スカイ・ジョー自身の戦果の記録はあいまいではつきりと残されて  
いませんが、戦火を交えた者たちの間では神憑りな噂が飛び交って  
おり、耳を疑うような内容ばかりです。……

しかしです。・・・

スカイ・ジョーといえど、我がタピオンベースの誇る第一警戒ライン突破は不可能ではないでしょうか？これ以上の出撃は無意味かと？・・・・・・

目的もわかっていませんし、もう少し様子を見ては？」

参謀長の意見は司令官には届かなかった。

それどころか薄笑いを浮かべ、こう切りだした

「ふふ・・・。僚機なし、単独というのが幸いだ。

なにが目的でやってきたのかは知らぬが、

我が基地で奴をしとめてやろうではないか、第一警戒ラインを超えてくることは、なんなりとも不可能、どれだけ奴がすごかろうと、戦果が“タピオン陥落”とはいかんだらう、」

オペレーター他、管制室の全員が驚愕の表情を司令官に投げかけた。司令官は基地内全部の回線を開くと、意気揚々とマイクに向かいしゃべりだした。

「タピオンベース待機中の航空部隊全パイロットソルジャー（傭兵）諸君につげる。

現在我が基地西方から“コ・モンランム”の戦闘ヘリ、マッドサンダーが接近中！

ただいまよりマッドサンダー撃墜ミッションを敢行する。

希望者は各機搭乗後、搭乗機端末よりエントリーを行へ、

戦闘機、戦闘ヘリ、戦闘航空機は全承認する。

誰が撃墜しても参加全員に通常機撃墜の10倍の特別クレジットを支給する。

戦闘域は、西側第一警戒ライン外と予想される。

当基地のVTOLマークスもすでに13機出撃した。

出撃機全機で協力し、我がタピオンベースに

“スカイジョー撃墜”の名誉を与えてくれ！」



それぞれ機種の違い戦闘ヘリがずらりと並んだ格納庫内で  
自機の整備をしていた傭兵達が放送を耳にしていた。

「あほくさ、よってたかって俺達雑魚が何匹集まろうと、やつに、  
かなうわけないさ、」

一人のひげ面の傭兵はそう言つと、自機の整備を切り上げどこかに  
消えていった。

何人かの傭兵も、ひげ面の傭兵と同じ意見らしく放送にしらをきつ  
た。

「俺は行くぜ」と、

自機の戦闘ヘリのコクピットに乗り込んでいた男が、  
コックピット内の端末にエントリーの入力を始めた。

「マグワ本気か？」

と機の横に立っていた背の高いふとちよの男が制止しようとした。

「お前も来いよ！ガイル」

マグワが背が高くふとちよのガイルを誘った。

「冗談じゃない、俺はまだ死にたく無いぜえ、」

ガイルがそういうと

「馬鹿かおまえは？・・正面きつてやりあうわけじゃねえよ、  
第一警戒ライン内からでも殺れるかしんねえし？」

誰かが殺ってくれてもいいわけだ。やばくなったらずらかればいい、

「  
マグワはそう言い足した。」

ガイルはきょとんとしていた。

「そうだな、VTOLが全滅つてのを、目処に撤収すれば・・・どの道ラインをこえてくるなんざ、不可能だ」

自機端末からエントリーコードを入力し終えたマグワがあきれ返っているガイルに向かっていった。

「エントリー完了!!」

マグワの機にミッションエントリー承認の連絡が入った。

「行くぜ、間近でみて見たいじゃないか、・・・スカイ・ジョーを・・・」

それに、スカイ・ジョーと絡めば女にももてるだろうよ!」

と、マグワは上方に開放されていたキャノピーをおろすとエンジンを始動させた。

メインローターがゆっくり廻り始めた。

ガイルの後ろで二人の会話を聞いていた数人の傭兵達もマグワの意見に賛同し自機に乗り込んでいった。

取り残されたガイルもあわててズングリとした大型のヘリに乗り込んでいった。

マグワの機が上昇を始めた。

すさまじい轟音を放つマッドサnderのジェットエンジンマッドサnderの後部はジェット噴射の明かりで光光としていた。

「ヘリオスベース管制塔よりマッドサンダーへ」

ジョーのもとに無線連絡が入った。

「タピオンベース滑走路より

FH-067EX VTOLマーカス13機と、多様種のジェット戦闘機7機、戦闘ヘリ8機の出撃を確認した。」

「承知している。」

ジョーが、もごもごと返事した。

「通常の警戒態勢とは様子が違うようだ。おそらく……マッドサンダー討伐が目的ではないかとおもわれる。」

「ヘリオスベースもしくは、近隣の駐屯軍からもそちらに応援を出そうか？」

「野暮用だからな、そこまでは必要ない、」

ジョーはきっぱりと応援を断った。

「しかし、相手が多すぎないか？」

「第一警戒ライン内に友軍の応援がとどくかな？」

「まさか、ラインを突破する気なのか？」

ジョーの右口元が釣りあがった。

「悪いことはいわん、冷静になれジョー」

司令官の言葉を制止するかのようジョー話した。

「せっかくの好意でありがたく頂戴しとくよ、ミサイル攻撃の応援を頼む、」

発射のタイミングと座標はこちらからデータ入力する。  
一番近場の友軍ミサイル砲台にシンクロしてくれ、」  
ジョーが応援を受け入れた。

「了解だ、健闘を祈る！」  
無線が切れると、再びジェットエンジンの噴射音がジョーの耳に入ってきた。

アルバート隊は、第一警戒ラインより  
タピオンベース側に2キロほど近寄った地点にいた。  
ハンス、BDを先頭に歩を進める。

突然、左翼を警戒していたノーバディーが皆を制止した。  
「全員伏せる」

ノーバディーが警戒した10時の方向と隊員達の間  
に大木が横倒しになっていた。  
隊員達はそこに身を隠すと

警戒した方向をノーバディーがナイトスコープで見据えた。

「ハンターか？」  
アルバートがノーバディーに尋ねた。

「わからん、ハンターとは気配が違う」  
ハンターとはAIを組み込まれたロボット兵器のことで、ノーバ  
ディーの感じた気配は  
もっと人的なものだった。

BDが、ナイトスコープで見渡す。  
「何か見えたか？」ハンスがささやくような小声で聞いた。

「見えね〜が、・・・・・・・・なんかいるぜ・・・」  
BDにも感じているようだ。

こちら相手もお互い出方を待っているようだった。

・しばらく不思議なくらいの静寂が続いた。

## Chapter 1 未来錯誤 06 歩兵狩り

### 06 歩兵狩り

「けっ、けっ、けっ・・・見つかったかな？」

頬のこけたギョロ目の男が、何かの乗り物のコクピット内で？

モニターの青白い光に照らされ気味の悪い声で独り言のように言った。

「感のいいのがいるようだ。楽しませてくれそうじゃないか？兄貴！」

もう一人、先の男とそっくりな顔をした男が、同じような乗り物のコクピット内で

先の男に話しかけた。

「ザビー、俺達ばかり楽しんで相手は失礼だろ？」

「楽しませてやらなくては、いつひひひ」

「ちょっと、つついてみてもいいかい？兄貴？」

「いいぜ、まだ。殺っちまうなよ」

「わかってるって、先制攻撃といくかな、」ザビーの方が少し動きを見せた。

アルバート班の左側60m程はなれた茂みの中からそれは立ち上がりアルバート班めがけて、砲身が5本ある回転式のガトリンクガンを掃射した。

ドドドドドドドドドドドドドドドド

アルバート班が身を隠している倒木を着弾の振動が襲った。

「ラウンドモビル」

ノーバディが叫んだ。

「2台だ」

とつさに身を伏せた。BDも叫んだ。

「NXインダストリーのトータスNXR-2085だ。トータスの最新型だ。」

モルフィスが動体センサーの識別コードで

ラウンドモビルと呼ばれた敵の形式を読み取った。

「まずいぜ、トータスの新型の装甲はこいつでは打ち抜けねえぜえ！」

語尾を荒げて構えていた大型の対戦車機銃をさしてハンスがいった。

ラウンドモビルとは身長が2.5m〜3m一人のりの

人型二足歩行装甲陸戦ロボット兵器で

主に陸戦兵器を開発生産するNXインダストリー社製

ラウンドモビル”トータス“は同社のパワードスーツ”タートル

“と並び

最大のヒット商品であった。

タートル、トータスともに亀と呼ばれるだけあり装甲重視の設計で特に、最新型トータスは装甲が厚く対戦車ライフル、機銃、通常の弾丸などものともせず、

陸戦部隊の前衛配備用として開発されたものであった。

と、そのときだった。

二台のラウンドモービルを大木をはさんで背にしていた。

隊員達の正面からロケット砲の弾丸が襲った。

ドツカッーン！！

隊員達の中央で爆発が起こり隊員達は右へ左へ吹き飛ばされた。

BD、ハンス、バーキン、ノーバディ、ギル、モルフィス、アルバート

が地面にたたきつけられた。

残りの3人は跡形もなく吹き飛んでいた。

正面にもう一台トータスが現れたのだ。

BDが立ち上がり、

「やろっ、うおっっっ」

叫びながら、対戦車機銃を乱射した。

その隙に、全員が、たたきつけられた痛みをこらえ立ち上がり、個々に身を隠した。

BDの対戦車機銃の弾丸は、前方のトータスに命中しているが、すべてその厚い装甲に跳ね返されていた。

ノーバディがBDの前のトータスめがけて手榴弾を投げた。

トータスは、右手に仕込んで有るバルカン砲でBDに狙いを定めているところであつたが

手榴弾の爆発で正面の視野をふさがれてしまった。

「やろっっ！うぜえ」

新しく現れたトータスのパイロットが叫んだ。

BDは、急いでその場を離れずそばの大木に身を隠した。

3台からちょうど死角になる位置だった。



「ずるいぞ、ガリイ、3人も殺りやがって」  
三番目のトータスに兄貴が怒鳴った。

「悪い、兄貴、目の前に捉えたんで、疼きをおさえきれなかった。」  
新しく現れたトータスのパイロット、ガリイがそういうと、

「でもよ、兄貴、おかげで奴らのテンションも上がったようだが、  
ヒヒヒ」

ザビーが、ガリイをフォローして不敵にわらった。

まるで、狩りをするかのように現れたトータス3台のパイロットは  
3兄弟であった。

「見ろよ、木の影に隠れて、安全だと思い込んでいる。」  
ザビーがBDを補足して、兄に報告した。

「それじゃ、あいつは俺がいたくぜ」  
と言い放つと、兄のトータスは、シオルダーランチャーからミサイルを発射した。

歩兵相手には、大げさ過ぎるほどの重火器装備が三台のトータスには施されてあった。

ミサイルはBDをその身を隠した大木もろとも抹消させた。

「悪いな、歩兵ちゃん、ちょっと強すぎたかな？ けけけッ」

兄弟は明らかに狩りを楽しんでいた。歩兵狩りを、

モルフィス、ノーバディー、バーキンが同じ木に身を隠していた。

BDの惨状を見ていたモルフィスは振るえあがり  
「やつら、歩兵狩りの、フェンス三兄弟だああ、」

と叫び取り乱してその木陰から逃げ出そうと飛び出した。

「さて、モルフィス」

ノーバディーが制止したがすでに遅かった。

飛び出したモルフィスをザビーのトータスがいち早く補足して、その機銃を放った。

何発もの銃弾がモルフィスを背中から打ち抜いた。

隊員が着ていたコンバットスーツは、防弾ジャケットもかねていたが、

トータスの放った銃弾はものともせず防弾ジャケットを貫通したのだ。

「いつまで、そんなところにかくれているのさ！」

長兄のトータスから、また、ミサイルが発射されノーバディーとバーキンの隠れていた木を直撃爆発した。

ノーバディーと、バーキンはすばやくそれを察知し、爆発をかわし、茂みに身を隠した。

「バリイ、ザビー、ガリイ、“歩兵狩りフェンス三兄弟”！」

バーキンが伏せながらそうつぶやいた。

「常に、最新型のトータスに搭乗し、歩兵戦のみの低クレジットミッションにしかエントリーしない」

「圧倒的重装備で、ミッション取得クレジットをはるかに上回る消費を戦場で繰り返す

収入のためのミッションエントリーというより

まさに、歩兵狩を娯楽目的としてのミッションエントリーで、どこかの企業の御曹司とも

うわさされている。」

ノーバディーは茂みの中からトータスを見据え、バーキンの言葉を聴いていた。

ノーバディーにとって初めて聞く話であるが、初めて聞いたような感じはしなかった。

「バーキンここにフラッシュアップ（閃光地雷）のしかけをしてくれ！」

バーキンはトラップの扱いに丈ていた。

「わかった。」

簡単なトラップ装置を、そこに設置設定すると

「アルバートたちと合流しよう」

ノーバディーとバーキンは立ち上がり走り出した。

フェンス3兄弟は、一斉にそちらを補足して攻撃に移った。

対人2人に、ミサイル、ロケット砲、機銃掃射で一斉に狙いを定めた。

「今だ！」

とノーバディーが、叫ぶと、バーキンは走りながら右手に握ったスイッチを押した。

隠れていた茂みから閃光があがった。

まばゆい閃光が辺り一面を白を通り越した白に包んだ。

そして、そこを攻撃しようとしていたトータス3台の電子アイを、炎症させるに至った。

トータス機内のモニターは真っ白になったまま、焼け付いた。

「くそ、やりやがったな」

バリイがそうつめいた。

「アルバート！」

ノーバディーがそう叫ぶと

アルバートが茂みから身を乗り出し

ノーバディーと、バーキンを向かえいれた。

そこは土が少しくぼんでおり、身を隠すには絶好の場所になっていた。

ハンス、ギルもアルバートとともに、そこにいた。

「作戦を練ろう、まともにやりあつて、勝てる相手じゃない」

ノーバディーがそのくぼみに滑り込むと同時に切り出した。

「練つても同じことだ、こちらには、やつらにダメージを与えられる武器がない」

ハンスが、全面否定的した。

「補足されずに離脱することを考えよう」

ギルが、つけたした。

「トータスは打ち抜けなくても、装備してル武器を破壊することは可能だろう」

バーキンがそういうと、

「先遣部隊と合流することが先決だ。」

アルバートが一括した。

「どの道、トータス3台を切り抜けるには無理がある。」

ノーバディーがそう言った瞬間

南東の空からVTOLのジェット音が聞こえてきた。

西へ向かう13機のVTOLの機底が森林の木々の間から確認でき

た。

次に、戦闘ヘリやジェット機も、何機か確認できた。

「ただの警戒にしては物々しいな  
何か、おっばじまるのか？」

ハンスが見上げながらそう言つと、

「タイミングを、合わせよう、

離脱するにしろ何にしろ、上で起こる事態を利用するほか手はない、

」

ノーバディーはそういつたが、

上空でなにが起こるかまったく見当がついていなかった。

## Chapter 1 未来錯誤 07 ドッグファイト

### 07 ドッグファイト

マッドサンダーは全速力で第一警戒ラインに接近していた。

第一警戒ライン内側では、タピオンベースのVTOLマーカス13機と傭兵達の戦闘ヘリが

ホバーリングして待ち構えていた。

ジェット戦闘機隊は高度をとりはるか上空を旋回していた。

ジョーはスロット脇のキーボードに、何かを入力すると左翼のサイドワインダーを、前方に向けて一発、発射した。

サイドワインダーは真つすぐ飛んで行き、

第一警戒ラインのセンサービームに接触しライン内に進入したかと思うと

サイドワインダーのジェットエンジンが突然停止し失速しだした。

と同時に地表から迎撃ミサイルが飛来しマッドサンダーの放ったサイドワインダーを撃墜した。

「何が無駄な、あんな間抜けなことを・・・ふっ」  
マグワが、その行動を見て鼻で笑った。

ジョーがサイドワインダーの状況をトレースしていたモニターから目を離すと、

第一警戒ラインをまっすぐ見据えた。

「さすがに敵機数が多いな、少し数を減らすとするか」

速度はそのまま、マッドサンダーが風を切った。

第一警戒ラインにまっすぐ接近している。

「マッドサンダー、第一警戒ラインに侵入します。」  
タピオン、ヘリオス各々の基地、待ち構えていたVTOL、傭兵達に緊張が走った。

何事もなく第一警戒ラインを通過しそうな勢いで接近するマッドサンダー

ゴーっとジェットエンジンの轟音をとどろかせながら  
勢いがとどまらないマッドサンダー！

「ライン接近、接近！」

「接近！」

「なに、ラインに突入??」  
誰もがそう叫んだ。

突然、ライン寸前でマッドサンダーが機首を左に向けた。

第一警戒ライン内のVTOL部隊にその機腹部を向け、体勢を立て直すと速度はほとんど変えず、北に向かいラインに沿って並走飛行しだした。

「ふゝ、驚かせやがって、越えてくるかと思っただぜ」  
マグワがそう言って、肩をなでおろした。

「越えられるわけがない、コントロール不能になるのは明白だ。」  
VTOLマーカスの隊長らしき男がそう告げたが、一瞬の焦りは隠せていなかった。

「我々VTOL隊を先頭に追撃を始める。傭兵ヘリ部隊につけ」

「戦闘機部隊は、高度を取って並走するよう」

V T O L、傭兵達の戦闘ヘリがライン内側からゆっくりと距離を置きつつ追撃を始めた。

V T O Lの先頭三機が逆V字型を作り速度を上げた。

第一警戒ラインをはさんでマッドサンダー追撃戦が始まった。

「マッドサンダーのけつが丸見えだぜ」

先頭のマーカスのパイロットがテンションをあげた。

「先頭隊、ミサイルのロックオン圏内にまで接近しろ、！」

最後尾に行くV T O Lマーカス隊の隊長が命令を発した。

「ラジャー、5番、6番、7番機、補足距離まで接近する。」

逆V字の先頭三機が速度を上げた。

マッドサンダーのシグナルを左前方少し上部に見据えた5番機

「ロックした。ミサイル発射する。」

マーカス5番機の両翼下部に備え付けられた対空ミサイルが発射された。

ミサイルは速度を上げラインを越えマッドサンダーに接近していった。

友軍の識別信号が発せられているミサイルはパルスレーザーの影響を受けることなく

第一警戒ラインを通過した。

マッドサンダーの後部から攪乱誘導ブイが射出され、

ミサイルを引きよせ、それに命中し爆発した。

6番機、7番機もミサイルを発射した。

また、攪乱誘導ブイが射出された。



と同時に、マッドサンダーの機首が少し下がリジェットエンジンが逆噴射を始めた。

ミサイルはブイにつられ爆発した。

マッドサンダーはみるみる平行飛行していた。VTOLと距離が近づき

真左下方にVTOLが来ると

バルカン砲を右旋回させ掃射しだした。

鉄の塊である弾丸はパルスレーザーの影響を受けず

ラインを素通りし、5番機に命中

砲芯を右に回転しながらさらに掃射を続け6番機、7番機に命中

三機は一揆にマッドサンダーのバルカン砲の餌食となり

爆発！空中分解した。

「VTOLマークス3機撃墜されました。」

タピオンベース内で、オペレーターが叫んだ。

「何、ラインを超えずにやり合って3機を一瞬に、……………」  
司令官が考えの甘さを実感したように絶句した。

マッドサンダーはそのままくると、180度転回し、今まで飛んできた方向に進みだした。

さらに距離を置いていた飛行していた後続VTOLの先頭機に、バルカン砲の弾丸を浴びせ

撃墜した。

すぐ後ろを飛んでいたVTOLが回避するため急上昇を始めたが無防備な機複部をマッドサンダーにさらけ出し、またもやバルカン砲によって撃墜されてしまった。

さらに後方の三機が牽制のためミサイルを発射し機種を下げ高度を森林の木々すれすれにまで落す回避運動を決行した。

マッドサンダーはバルカン砲でミサイルを撃墜しつつ  
ナパーム爆雷を投下した。

ナパーム爆雷が地上に着弾すると、すさまじい火炎が第一警戒ラインの内外に広がっていき

機体を下げたVTOL三機を包み込んだ。

ジェットエンジンの吸気口から火炎を吸気してしまったVTOL三機は

次々と、エンジンがら火を噴き、爆発していった。

後続の5機は、右旋回して追尾体制をときつつ、マッドサンダーから距離を置く位置まで回避した。

さらに後方に十分に距離を置いていた傭兵のヘリ部隊もマッドサンダーとの距離をおいた。

「なんてやつだ、VTOL八機を、一瞬で撃墜しやがった。」  
マグワが感嘆の声を上げた。

「やつには、第一警戒ラインなんて、全然ハンデになってないじゃないか、  
というより、俺たちのハンデにしまった。」  
ガイルがそういうと

「接近したら、おまえのトンベリ号なんて、真っ先に餌食になってしまっぞ、」  
マグワがガイルにくぎを刺した。

「そう思う、俺は一足先に離脱するよ！」

「そうしな、俺はもうちょっと、見学としゃれこむ」

「気を、付けなよ」

ガイルはそう告げるとミサイルをマッドサンダー目掛け数段発射して、大きな機体を右旋回し始め帰還体制に入った。

「何しやがる。あおってどうする。」

マグワが焦った表情で、マグワに叫んだ。

「置き土産だ。ははは」

「アホか」

呆れ、顔でマグワがつぶやいた。

マッドサンダーは、ライン外側に沿って南へ向かっていた

VTOL5機は追尾する形をやめ、バルカン砲の届かない距離に遠ざかり

監視体制に移っていた。

傭兵の先頭へり部隊もそれに続いた。

上空で待機中だったジェット戦闘機隊が痺れをきらし降下を始めた。

「イライラするぜ、マッドサンダー攻撃に移る。」

「待て、もう少し様子を、あちらが動くのを待つんだ」

VTOLマーカスの隊長が制止したが、聞かずにみるみる高度を下げていった。

「あちらが動いたからやられたんだろあんたたちは、」

「動く前に、スピードの違いを見せつけてやる。」

先頭の機体が両翼のサイドワインダーを、発射した。

マッドサンダーはぎりぎりのところでそれをかわした。

続いて機首に内蔵されているバルカン砲を掃射

これも、マッドサンダーは難なくかわし

すぐに右旋回し第一警戒ラインから離れ距離をとる。

ジェット戦闘機のパイロット舌をうった。

「くそ、小回りが利きすぎる。」

「当たり前だ、馬鹿！」

マグワが、ジェット戦闘機のパイロットに言った。

後続機も同じ動作で攻撃をするが、まったく同じようにかわされてしまった。

最後の戦闘機が攻撃を終えると右旋回で回避し上昇していった。

マッドサンダーは高度をVTOL隊と合わせ第一警戒ラインから距離をおいたところでまた進路を南に向けた。

「どうする気だ？ラインに侵入してくるでもなく」

VTOLマーカスの隊長がそいいながらマッドサンダーの様子をうかがっていた。

「動いた！」

マグワが叫んだ。

マッドサンダーが右旋回し更に第一警戒ラインから離れていった。

「退却する気か？」

戦闘機のパイロットが上空に戻った位置からそう告げ

「ラインを越え追尾する。」

と、行動に移った。

VTO Lも並走をやめ少しライン内に近付きホバーリング状態で待機態勢に入った。

「何しでかすんだ？」

マグワの機がVTO Lに接近し、待機態勢に移った。

突然、マッドサンダーが180度向きをかえ

4基のジェットエンジン全開でVTO Lの方向へ第一警戒ラインに直角に直進してきた。

「ラインを超える気か？」

さまざまな憶測を飛び交わせたが、何が起ころかは誰にも分らなかった。

マッドサンダーはみるみる第一警戒ラインに接近してくる。

「さっき、みたいに猫だましくらわす気じゃねえか？」

マグワが叫んだ。

「マッドサンダー第一警戒ライン再接近！」

タピオンベースの管制塔より迎撃部隊各機に連絡が入る！

マッドサンダーはスピードを落とさず第一警戒ラインに接近してきた。

「突入してくる!!」

マグワが叫んだ。

「何、突入するだと、ありえん!」

司令官がこぶしを握り締めた。

マッドサンダーは今に第一警戒ラインに突入しようとしていた。

ライン突入寸前、マッドサンダーのジェットエンジン、識別灯ヘッドライトなどが突然消え

コンソロールモニターの明かりだけが

マッドサンダーのコクピットに座るジョーの姿を浮き立たせた。

すぐにその光も消えると、

あたりに、警戒音が鳴り響き、地上の自動砲台からミサイルが数段発射された。

「マッドサンダー、第一警戒ライン通過!!」

無線が、迎撃部隊に入ってきた。

マッドサンダーはコクピットのコンソロールモニターが立ち上がり光で浮きあがると同時に

4基のジェットエンジンを全開にして急速上昇を始めた。

「ラインを越えやがった。しかもまともに動いてやがる。」

マグワ達傭兵やVTOLマーカスは、ありとあらゆる武器で攻撃を始めた。

それは地上から放たれた迎撃ミサイルと混ざり合いいくつかは接触して爆発し

いくつかは、切り抜け、マッドサンダーを追尾した。

「越えてきたのか？」

司令官がオペレーターに訪ねた。

「はい、しかも、パルスレーザーの影響をなにも受けていません！」

「突入の瞬間だけ全ての機能を手動停止させたようです。」

「手動で全てをオフにしてライン通過後手動でオンにしたというのか、

全ての機能を呈した割には、起動が早すぎやしないか、」  
司令官が疑問をぶつけた。

「マッドサンダーのPCは“コ・モンラム”の特殊な“レジアスCPU”を使っているようです。その処理スピードの所為でしょう！」

参謀長が答えた。

上昇しながらマッドサンダーは後部攪乱ブイ発射口に併設されている。

ミサイル口から、爆裂ミサイルを発射

マッドサンダーから一定距離を置いてそれは爆裂散開し

追尾してきたミサイルを巻き込んだ。

地上からは、初弾で撃墜できなかった自動砲塔やミサイル台が、攻撃を繰り返した。

上空待機中の戦闘機部隊がマッドサンダーめがけて降下を始めた。

「はさみうちにしてやる」

マッドサンダーはあえて、戦闘機隊のほうへ機種を向け上昇を続けた。

地上から自動砲台のミサイルや、V T O L等のミサイルが、再度、マッドサンダーの後方に接近していた。

すると、マッドサンダーはあおむけになるように、機体を反り返らせ、急速宙返りをして

下降を始めると同時に攪乱誘導ブイを、戦闘機隊の方へ発射した。下方からマッドサンダーを追ってきたミサイル群は、攪乱誘導ブイに翻弄され

マッドサンダーへの照準をすでに狂わされていた。

「なにーっ！」

上空から降下中の戦闘機隊の正面に攪乱誘導ブイによって導かれてきたミサイル群が飛び込んできた。

先頭を降下中の戦闘機二機がミサイル群に巻き込まれ撃墜された。残りは、ぎりぎり回避して旋回し、また上昇を始めた。

「へりにあんな芸当ができるのかよ！」

急激に降下しだした。マッドサンダーは、真上から。V T O Lや傭兵達の戦闘ヘリを襲った。

水平ホバーリング中のV T O Lや戦闘ヘリには、真上からの攻撃に對抗する武器が装備されていなかった。

慌てて機首を上げ出すが・・・

地上からは、マッドサンダーを狙った自動砲台によるミサイルや対空機銃が発射し続けられていて、

行動が制限されていたため

V T O L 3機と傭兵の戦闘ヘリ3機が

マッドサンダーのミサイル攻撃によって撃墜させられた。

「タピオンベース、自動砲台の攻撃が行動の邪魔になる。当エリア内の攻撃解除をしてくれ」

V T O L 隊長機はミサイルのかいまをくぐり、マッドサンダーの攻撃もかわしながら



慌てて、交信していたが、マッドサンダーのバルカン砲に打ち抜かれ撃墜されてしまう、

戦闘ヘリも2機バルカン砲の餌食となった。

マグワの戦闘ヘリの、右翼にバルカン砲の弾丸をが命中した。

「やばいぜ、むちゃくちゃやばいぜ、」

被弾しながら大慌てで、回避行動をとる。

「リミットの、VTOL全滅、逃げたいが逃げるに逃げられねえ」

左翼にバルカン弾を着弾し、弾は翼を貫通して、装備していたミサイルポッドに命中した。

「ぐわっ！！！」

慌てて、ミサイルポッドを切り離れたが、爆発の衝撃は機体を包み込んで

体制を立て直すのはとても不可能なことであつた。

マッドサンダーは、戦闘機三機を残し

地上の動作を停止した。自動砲台を確認すると

モンランム軍のミサイル基地にシンクロし、ミサイル発射台に攻撃を開始させた。

「ミサイル接近！」

タピオンベースに緊張が走った。

「第一警戒ラインの西北から戦闘空域に多数接近しています。」

「ライン通過後は、意味のないものになるのに無駄な事を」

司令官はそう叫んだ。

「いけません、指令！！オペレーター早く自動砲台を、停止させた自動砲台の起動を！」

参謀長が慌てて叫んだが既に遅かった。

マッドサンダーからのデータ指令でモンラムミサイル軍が飛来してきた。

第一警戒ラインを通過すると同時に推力を失ったミサイルだが、

惰性落下で的確に、近辺の自動砲台、自動対空銃を、せん滅していった。

ジョーはマッドサンダー突入時のマニュアルを、ミサイル群にもインプットしていたのだった。

上空でそれを見ていた。戦闘機隊が

「全滅だ、VTOLもへりも自動砲台も！」

「明らかに我々に、勝ち目はないな、」

「マッドサンダー討伐、残存戦闘機部隊、帰還する。」

マッドサンダーの突入した第一警戒ライン辺りは静まり返りマッドサンダーの飛行音だけが残った。

## Chapter 1 未来錯誤 08 傍観者

### 08 傍観者

森林の炎はほとんど消えている。

ブスブスと音を立てながら焼かれた木々が黒煙を撒き散らしていた。マッドサンダーは直陸できるポイントを探していた。

時を戻し、

アルバート班と同様に

フェンス三兄弟も、南上空のVTOL隊を、補足していた。

「何が起こつてやがる？」ガリイがつぶやいた。

「第一警戒ラインでお祭りが始まるようだ。それもどでかいやつが」  
バリイが説明をした。

58

「無線を切ってるのか？がりい？

さつきから、航空部隊への緊急ミッションのオフアコードが鳴りつばなしだぞ！」

ザビーも付け加えた。

バリイが

「かわいそうな奴らだ、VITOLが何機かろうが、ひとたまりも無いだろうよ、」

というと、ザビーも続いた。

「自分より強い奴を相手にしても、無駄な浪費に終わる。痛い思いして何が楽しいのやら？」

バリイが

「もつとも、自分より弱い奴を相手に大げさな重火器で立ち回るのも、無駄な浪費だな、へへへへ」

「何が始まるって云うんだ？」

ガリイが答えを求めた。

「オフアーコードを受信してみる！」

二人の兄に一括された。

「わかたよ、」

少しテンションをさげてガリイが返事をし操作ボタンをオンにした。

「なんだと、奴が来てるのか？・・・スカイジヨが、」

しばらく、闇夜を見上げる3兄弟だった。

それは、土のくぼみに身を隠していた。アルバート班も同じだった。

やがて、周りの木々の間からミサイルだの対空機銃の砲火が上がり一点をめぐって飛んで行った。

上空で爆発が起こり、闇の夜空に閃光がきらめき、森林を照らした。

すると、南側上空で待機していたVTOL隊が次々と右旋回してこちらに迫ってきた。

「始まりやがったぜ、」

「始まった。」

「動いた。」

フェンス三兄弟が口をそろえて叫んだ。

三機が先行して上空を通り過ぎた。  
続いて後続機が

しばらくして

北の方の空で爆発が起こった。

すぐ続いて二回、間をおいてまた爆発が続いた。  
爆発はどんどんこちらに戻ってくる。

突然アルバートが皆を促し走り出した。

「急げ、内環に向って走れー！！巻き込まれるぞー！」  
と同時に少し北側の木々が真っ赤に燃えあがった。

そこで発生した火災はアルバート班とフェンス3兄弟に迫ってきた。  
アルバート班の隊員は皆間髪を容れず逃げることができたが、  
フェンス3兄弟のトータスは火災にのみこまれていった。

「うわーっ」

「くそっ」

「ひひひー」フェンス3兄弟はまた口をそろえて各々違う言葉で  
さげんだ。

「野郎ーっ！ー」

ガリイのトータスが、火炎を振り払い西上空に向けロケット方の照準を合わせた。

「やめろガリイ、」ザビーが制止した。

「奴は、まだ防衛ライン外だし、下からの攻撃には無防備になって

いるはずだ。

「今なら！」ガリイがザビーの制止を振り切ろうとした。

「噛みついてただで済むわけにはいかねえぞ！」

バリイが、怒鳴った。

「見てみるあれだけの航空部隊がもう半滅だ。」

その時またも、周りの木々の間からミサイルだの対空機銃の砲火が上がり

一点をめがけて飛んで行った。

そして次々と上空で爆発がおり

待機していたヘリ部隊の何機かは、戦場から離脱を始めていった。

「全滅だぜ、あつというまじゃねえか？」

「あんな奴とまともにやりあわねえ方がいい・・・わかっただろ」  
バリイがガリイを説得した。

「歩兵どもも何処かへ姿をくらました。」

こっちはこっちで楽しもうじゃねえか、なあガリイ」

「ああわかった。」不服そうにガリイが答えた。

## Chapter 1 未来錯誤 09 キルメス研究所

### 09 キルメス研究所

キルメス研究所は“コ・モンラム”の首都“レジアス”の中心部  
軌道エレベータの建造物内にあった。

コンクリートに囲まれた部屋が並んでいる  
部屋のなかは、表面にエンボスを施したプラスチックで内装してあ  
って

触れても冷たくは感じないが、いたって閑散としていた。

その僅か9平米程の個室の一つに  
少女はいた。

> i 3 2 2 5 6 — 4 0 9 9 <

真っ白なプラスチックの天井壁床  
入口の扉と反対側の壁にモニターがしまれていて、  
真っ白なシートでつまれたベッドが一つ  
何のために使うかわからない机と、椅子

その椅子に、どこを見てもなく焦点の定まらない目をした。  
ポンチョのような何かの検査着を  
着るというよりは羽織った。  
少女が座っていた。

コツコツと足音が近づいてきた。

その部屋の前に、重武装を施した警備員がやってきた。

警備員はドアについているカードリーダーにカードを通すと

顔の高さに設けられたカメラに近寄り右目を翳した。  
その後、カードリーダー脇にあるパネルに右手親指を押し当て、先ほどと違うカードをもう一度カードリーダーにおした。ロックが外れる音がし、扉が自動的に廊下から見て左に開いた。IDカード、網膜認証、指紋認証、扉を開ける都度発行される。指示認証カード、4段階の認証でロックが解除される仕組みになっていた。

扉が開くと少女は声も無く立ち上がりゆっくりと扉の方に近寄った。警備員が扉を閉めて歩き出すと、お互い言葉を交わすことなく。少女は警備員の後について歩き出した。何度も繰り返されてきた行動のようだ。

エレベータに乗り上の階へと移動する。

目的の階でエレベーターを降りると、その階にはLaboratoryと入口上に書かれたいくつもの部屋がかなり広い間隔で並んでいた。

長い廊下を歩きLaboratory7の扉の前で警備員は足を止めた。

少女が扉の前に立つと扉のロックが自動的に解除され扉が左右へ開いた。

少女が部屋の中にゆっくりと入っていくと、扉はまた自動的に閉まりロックされた。

その部屋は先ほど少女がいた部屋とは比べようもなく広く、数人の白衣を着たスタッフが行き来していた。



手前半分の天井が高く奥半分には二階があり、手前半分の部屋を見下ろせるよう硝子張りになっていた。

天井が高い範囲の中央には円形になった8人分の寝台があり

少女と同じ服装をした7人の少年少女達がすでにその寝台の上に横たわって

体のアチラこちらに、センサーと思われる電子機器の端末を取り付けられていた。

空いている寝台に、少女も導かれ横たわり、同じ様に端末を取り付けられた。

すると、円台の上部から少年少女8人の上半身を覆い隠すカバーが降下してきた。

二階の硝子貼りの部屋の内部の人々があわただしく動き出した。

下を見降ろす硝子張りの部屋は管理モニタールームで、

少年少女8人各々の様態を様々な計器が捉え表示していた。

「シンクロ率、拒絶反応を確認します。」

サテライト1	+ 4 9	・ 2	- 4 9	・ 2	+ 4 3	・ 8	- 5 2	・ 1
サテライト2	+ 4 9	・ 1	- 4 9	・ 6	+ 4 3	・ 9	- 5 2	・ 9
サテライト3	+ 4 8	・ 1	- 4 9	・ 3	+ 4 4	・ 9	- 5 1	・ 1
サテライト4	+ 4 9	・ 1	- 4 9	・ 9	+ 4 6	・ 9	- 5 3	・ 1
サテライト5	+ 4 9	・ 1	- 4 9	・ 9	+ 6 0	・ 9	- 5 9	・ 1
サテライト6	+ 4 8	・ 4	- 4 8	・ 2	+ 5 9	・ 9	- 4 9	・ 1
サテライト7	+ 4 8	・ 6	- 4 9	・ 2	+ 5 3	・ 9	- 4 9	・ 8

サテライト8 + 3・5 - 6 9・8 + 8 3・9 - 0・2 3

拒絶反応0

細身の男性スタッフがそういうと、キーボードをはじき出した。しばらく間を開けて

「：前日比 + - 0・0 0 3、クリアレベル持続しています。完全に安定しています。」

「サテライト8は依然数値に偏りがありますが、の - との + が高い数値を示してますのでサテライトとしては合格ラインです。」

「マニュアルコード入力します。」

30代前半のメガネをかけた女性が報告と同時にキーボードをはじき出した。

「脳波レベル以上ありません。」

ミッシェンコード入力しますか？」

「レベッカ、a - 3 9とx - 7 9のミッシェンコードを入力してくれ。」

髪が肩までのび無精髭を生やした中年の男がレベッカと呼んだ30代前半のメガネをかけた女性にそう指示した。

「わかりました。ギルモン博士、入力完了！  
続いて、・・・」

本当に、打ち合わせした実験を開始しますか？」

実験内容の種子に疑問を持っていたレベッカが博士に問う

「そうだ」

ギルモンが答えた。

返事もせずレベッカが

「実験用シュミレーションルーム01～08のデータを

サテライト01～08にアップロードします。」

しばらくして、硝子張り上部のいくつも並んだモニター画面に  
実験用シュミレーションルーム01～08の画像が映った  
各部屋を4台のモニターがそれぞれ違う角度から映しだしていた。

ギルモン博士と呼ばれた男が

「コードmn-01 dr-01を入力」

というと、レベッカと細身のスタッフがあわただしくキーボードを  
弾きだした。

「run!（実行）」ギルモンが言うと

スタッフ全員が上部のモニターを見つめ始めた。

モニターに映った部屋は先ほどまで少女がいた部屋とまったく同じ  
形をしていた。

やがて、実験用シュミレーションルーム01～08

各部屋の入り口扉と反対側の壁に埋め込まれていたモニターに  
各々、時差こそあれ明りが灯った。

そしてIDカード、網膜認証、指紋認証、扉を開ける都度発行され  
る。

指示認証カード、4段階の認証でロックが解除されるはずの扉が。  
周りに誰もいないのに開いた。これも、時差こそあれ全室

「a-39とx-79のミッションコードmn-01 dr-01  
オールクリアです。」

レベッカが報告し疑問を投げかけた。

「この実験は今のサテライト8に行ったのは危険じゃありませんか

？」

ギルモンが答える

「今の段階では、こちらからの入力がなければサテライト8は何もできない、

それを訓練させるのは、我々の手を離れ次のステップに移行してからだ。」

「脳波レベルも安定していますね。全員合格ラインに達しています。間違いなく、役員評議会の承認を得られますよ、ギルモン博士！」と肥満体形の眼鏡の男が言った。

ギルモンが

「確かに、後、数回最終調整をすればサテライト8は、次の段階にステップアップできる……のだが……」  
と少し頭を抱えて答えた。

「レベツカ、役員評議会にデータを送信してくれ、承認完了後

準備が整えば、現サテライト8は最終調整を終えた後私たちの手を離れ次のステップへと移る。

我々は、次のサテライト候補を育成する。」

と、いったあと肥満体形のメガネの男に耳もとにささやいた、

「ベルモット、頼みがある」と耳打ちで話しかけた。

ベルモットは耳元で何やら囁かれた。

「……わ。かりました。次ステップのスタッフに引き継ぐまで、それまでに何とかしてみます。」

少しためらったがギルモン博士の頼みを受け入れた。

レベツカの視線がそれを冷ややかに見つめていた。

## Chapter 1 未来錯誤 10フェンス3兄弟

### 10フェンス3兄弟

マッドサンダーの周りには飛行する物体は何もなかった。

マッドサンダーはゆっくり高度を落とすと、急にエンジン音が虫の羽ばたき程の音になった。

“ステルスモード実行中！”とモニター画面の右下にロゴが点滅し出した。

ジョーがスロットル脇のキーボードをはじきだした。

着陸ポイント検索中とモニター画面に表示されてしばらくすると地点の座標が示された。

と、同時にオフアークールが鳴った。

強制的に画面が切り替わり

ヘリオスベースの司令官が8インチの画面にに映し出された。

「タピオンベース第一警戒ライン攻略おめでとう。

出撃オフアーとは、関係なくタピオンベース第一警戒ライン攻略にはコンプリートクレジットが、設定されていた。

よって、君の口座にボーナスクレジットが振り込まれる。」

少し間を空けて司令官はきりだした。

「攻略ついぞと言っては何だが、

パルスレーザーのコントロール施設を破壊してはくれんだろうか？・

もちろん、コンプリートクレジットが、設定されているので、ボーナスクレジットも発生する。」

「悪いが野暮用で来た。ミッションにエントリーする気はない」とジョーは答えると同時に回線をきった。

マッドサUNDERがステルスモードに切り替わった瞬間！  
タピオンベース内でざわめきが起こっていた。

「あのまま、パルスレーザーのコントロール施設を破壊しに来るか  
と思ったが  
着地しているのか？」

司令官が、オペレーターに問い詰めた。

「いえ、速度も落ちていましたし、おそらくステルスモードに入っているのかと、」

「はじめて、奴に出くわしたが、あそこまですごいやつとは思いませんでした。」

司令官は驚きの表情を隠せない

「先ほどの戦闘で燃料、弾薬などはかなり消耗しているはずで。  
乏しい残量で、パルスレーザーのコントロール施設を破壊する他に  
ゆとりはないでしょう、」参謀長が補足事項をつたえた。

「なるほど、では、もう一度包囲網を引こう、  
特Aソルジャー、のみにオフアコードを送れ、奴が動き出すまで  
待とうではないか、」  
司令官の口元がニヤリとつりあがった。

マッドサンダーは木々の隙間に着陸した。  
と同時にローターが回転数を落としてゆく  
ジョーはヘルメットをはめたまま草地におりたった。  
すると、開いたままだったコクピットのキャノピーが自動で閉まり  
モニター画面に“待機、遠隔脳波感知モード”のロゴが表示された。  
ジョーはマッドサンダーを左後方に置き、木々の間を歩きだした。

突然周りの木陰から、トータス3機が飛び出てきて  
とつさに身構えたジョーを取り囲んだ。  
フェンス3兄弟のトータスだった。

ガリイがジョーの正面に  
ザビーはジョーとマッドサンダーの間ジョーの左後ろに  
バリイは右後ろに

「わはっははは、こいつはとんだとこで出くわしたな、  
あんたがスカイ・ジョーだろ、そしてあれがマッドサンダー  
第一警戒ラインを越えて来るとは流石だ。感心しちまう！」  
と叫ぶとバリイの乗ったトータスの左腕が真横に上がり  
マッドサンダーをさした。

マッドサンダーの機種下部バルカン砲が音もなく静かにガリイのト  
ータスをとらえた。  
マッドサンダーのコクピットモニターには、トータスの情報が浮か  
び上がってきた。

それはジョーの被っているヘルメットのゴーグル部にうかびあがっ  
た。

「こんなところで呆気なくスカイジョーをやれるとは思わなかった



ぜ、」

ガリイが声にドスをきかせて、ジョーに言った。

ジョーのヘルメットのゴーグルに映しだされる情報にはトータス装甲の固さが表示された。

「現状のバルカン砲弾では、一撃でしとめることは無理だな」

一撃で仕留めなければ包囲が崩れず。殺られてしまう少なくとも2機同時に動きを止める必要があった。

「ATL準備！」頭の中でジョーはそうつぶやいた。

『Advanced Tactical Laser』（高度戦術レーザー兵器）

の準備をマッドサnderに脳波で指令した。

ゴーグルに前方ガリイ機に照準ロック、チャージタイム180秒と表示、

ATL砲のチャンバー内にエネルギー充填が始まりカウントダウンされだす。

時間稼ぎが必要になった。

「スカイ・ジョーを殺つちまえば、フェンス3兄弟の名が上がる、そうすればオファークレジットも上がる。」

金なんざ、どうでもよいが、あるにこしたことはねえ」

ザビーが、付けくわえた。

ジョーはその言葉を聞いてにやりと笑った。

「金が欲しいなら、今すぐ俺を殺さないことだ。」

「おや、命乞いか？・・・スカイジョー抹殺の名誉も欲しいんだが、バリーが」

「今、俺にはある会社からオファーが来ている。もちろん断るつもりだ。だが、そうになると、その会社は、おれの首に賞金を懸けるらしい?」

「そうか、賞金が掛ってからやつちまえばいいのか。」  
ザビーが舌なめずりをした。

「はったり、かましやがって、俺らを担ぐきか?」  
そういったガリイにジョーが

「ピュアアイランドって会社検索してみな!」

と同時にトータス内でザビーがキーボードをはじいた。

「ピュアアイランド者懸賞金対象者候補、・・検討中!と出てる」

「なるほどな、ザビー、業者に連絡して、タピオンベースにトレイラーを

用意させる」

「ジョーをさらって、マッドサnderをいただく!」

バリイがそういうと同時に

ジョーのゴーグル内のカウントが0になった。

ピュンと風を切る音がしてマッドサnderから放たれた閃光はガリイのトータスを貫いた。

と同時にマッドサnderのバルカン砲が、うなりだす。

ザビーのトータスに何発も何発も至近距離から着弾、装甲を貫きはしなかったがその機体を押し飛ばした。

すぐさまバルカン砲の銃口はバリイ機をとらえ

連射して押し倒した。

とまた、倒れていたザビー機を容赦なく掃射した。分厚い装甲は凹凸と、くぼんでゆく

ジョーはすきを見て倒れていたバリイ機に近寄りトーターズ外部に設けられたコクピットの強制解放レバーを引っ張った。

分厚い鉄のキャノピーが開き頭を抱えた。ガリイにハンドガンをつきつけた。

容赦なく掃射されるバルカン砲

ザビーは、押しつぶされていく装甲の中で、身動きが取れなくなっていた。

バリイのトーターズはロケットランチャーを構えたままピクリとも動かなかった。

キャノピーの正面に小さな穴があいている。

それと同じものがコクピット内に座っていたガリイの額にもあった。

バルカン砲の連射音が止まった。

パン、パン、パン、パン

ハンドガンを発砲すると、

ジョーは再びマッドサンダーに乗り込んだ。

「邪魔が入った。」と呟くとキーボードをたたきただす。

ローターが回転しだし低空飛行に入る。

モニターにはアルバート班トレースと表示された。

凹凹にへこんだトータスの中でザビーがもがいていた。  
「た、た、たすけてくれ、あにき……たた、た」

バリイは身動きが取れなかった。

「痛え、痛えよ、…痛え」

両肩の付け根と、両大腿の付け根を打ち抜かれていた。

## Chapter 1 未来錯誤 11 ロブ・キンズキン

11 ロブ・キンズキン

マッドサンダーは、また木々の間に着陸していた。  
アルバート班をトレースし位置を確認した後であった。

ジョーの姿はその近辺には見当たらなかった。

半分の人数に減ったアルバート班は  
第二警戒ライン手前でキース班及び先遣部隊と合流すべく  
警戒行動を執っていた。

アルバート

ハンス

ギル

バーキン

ノバディ

失った隊員たちの役目をホローしながら歩を進めていた。

突然背後からガサガサと音が鳴った。

全員が各々の武器の銃口をそちらに向けて構えた。

木々草々の間から重々しいヘルメットをした。  
パイロットスーツの男がそこに姿をあらわした。  
ジョーであった。

隊員たちは味方のパイロットスーツを確認すると、銃口を静かに下ろした。

アルバートが

「さっきの戦闘で撃墜でもされたのか？」

「にしては、きれいな身なりだ」  
ギルがそう言った。

ジョーが隊員たちに訪ねた。

「アルバートの隊だな？」

「そうだ、俺たちに何か用か？パイロットさんよ」  
アルバートが返事をする

ハンスがジョーにちかよりながら  
「こりゃ、戦闘ヘリのパイロ」

ジョーがハンスの言葉をさえぎり

「ロブ・キンズキンはいるか？」

ノーバディーは、聞き覚えのある名前に動揺し  
その名が彫つてあるペンダントを握りしめた。

アルバートが

「そんな名前の奴はいない、隊が違ふんじゃないのか？」

ハンスが

「撃墜された様子でもなさそうだし、わざわざそいつを探しに来たのか？」

ジョーがまた口を開いた。

「では、ノーバディ・コロイドは、」

バーキンが一步足を踏み出して

「ああ、そいつなら。」

「そいつなら、やられちゃったぜ！」

ノーバディがバーキンの言葉にかぶせてそう叫んだ。  
と同時に自分自身を問い詰める

『何故隠すのだ、何故自分だと名乗らない？』

ヘルメットを深々とかぶりゴーグルをはめていたので  
顔までは確認することはできない

ノーバディの異変を察知したバーキンが

「さっき、トータスの襲撃にあってな、見る影もなくやられちゃったよ」

アルバートも言葉を付け足した。

「その通りだ、わざわざの御足労、無駄足だったな！」  
皆がノーバディの意図を察知しかばいはいった。

ジョーが

「あいつが、それも簡単にくたばるわけがない・・・  
全員のIDを確認したい！認識プレートを！」

「ついさっき誰かが落としたナパームにあぶられて壊れちゃったよ  
認識は難しいと思うぜ！」  
ギルが言った。

「・・・・・・・・致し方あるまい」

と、ジョーは五人をにらみつけ、間をおいて

「全員引き揚げるがいい、他の班と合流して撤退しろ

パルスレーザー施設破壊何ぞもともと歩兵部隊には不可能な作戦だ。多くの消費破壊を繰り返し生産を生む

お前らは”モンランム”に利用されているんだ。」

「何！」ハンスが噛みつきかかるが

それは皆がうすうすかんじていたことだった。

「ミッションはコンプリートされてクレジットはお前らのもとに支給される。

だからいいか、今すぐ他の班と合流して撤退するのだ。」

ギルが質問した。

「どういうことだ？」

「俺が今からレーザー施設を破壊する。

クレジットはお前達歩兵部隊に譲渡する。

誰が受け取るか？・・・それでお前達のIDがはつきりわかる。」  
「  
と言いつつ放ちジョーは木々の中に消えていった。

「何者だ、やつは？」とハンスが首をかしげると

「ジョー・クレンナ・・・スカイ・ジョーだよ」

とアルバートが皆に向けていった。

『何故、スカイ・ジョーがお前を探しているのだ？』

皆の瞳はそう言っているかのようにノーバディを見据えた。



『スカイ・ジョーの名にも聞きおぼえがある』  
ノーバディは感じた。

それは皆の聞き覚えとは少し違ってもつと密接なものであった。  
ジョーはロブ・キンスキンといった。

頭の中で何かがぐるぐるとまわり

急に頭に激痛が走りだした。

ノーバディは、頭を抱えその場に崩れ落ちた。

「おい、大丈夫か？ノーバディ？」

廻りの隊員たちがノーバディにかけよっていった。

ジョーはマッドサンダーに飛び乗るとすぐさま飛び立ち

ヘリオスベース司令官への回線を開いた。

司令官がモニターに映し出されると

「ジョー・クレナだ。先ほどのオフアーを引きつける

獲得クレジットは現在作戦遂行中の地上歩兵部隊で分配してくれ」

ジョーはそういうと一方的に回線を切りオフアー承諾コードを入力  
するとマッドサンダーを旋回させた。

衛星軌道上からの地上情報を得ることのできないタピオンベースエ  
リアだったが

ジョーはすでにマッドサンダー内で検索を終え、パルスレーザーコ  
ントロール施設のおよその位置範囲を把握していた。

マッドサンダーはステルスモードのまま、パルスレーザーのコント  
ロール施設へ向かった。

第二警戒ラインを通過したマッドサンダーは、

ライン防御に当たる配備歩兵団に目視された。

タピオンベースでは

「動きましたマッドサンダー、第二警戒ライン、9時36分地点を通過

歩兵部隊が、目視にて確認しました。」

「レーザー施設にエントリーしている

特Aランクソルジャーの機体は何機になる？」

司令官がそうオペレーターにといかけた。

「空中戦用戦闘ヘリが3機です。」

「それと、対空用に装備を施した。陸戦ラウンドモバイルが2台計五人のエントリーが完了しています。」

「少し、数が少ないような気がするが、スカイジヨ と、同じ特Aランクだ・・・」

と司令官はひとり言のようにつぶやき切り出した。

「待機中の全特Aソルジャーは警戒態勢をとれ」

ジヨーはパルスレーザーのコントロール施設を、おおよその段階までは把握していたが

一点に絞り切っていたわけではなかった。

わざと、第二警戒ライン上配備の歩兵団の上空を通過したのであった。

マッドサンダーのコンソロールモニターにエネミーシグナルの感知アラームが表示された。

「動いた、これで位置が絞れた。」

とたんに、マッドサンダーはパルスレーザーのコントロール施設に向けて両翼端のサイドワインダー 各々一基ずつ発射、その後急上昇を始めた。

タピオンベースのオペレーターが

「感知反応あり、ミサイルです。コントロール施設に向っています。

」

「エントリー中の全特Aソルジャーは戦闘行動に入れ、後は、任せ  
る」

司令官はそう命令を発した。

「了解！」戦闘ヘリ隊の一人が返信した。

「さて、正面から来るミサイルは囷だ、どこから来るのかな？マッ  
ドサンダーは」

キルメス研究所内

その僅か9？程の個室の一つに

どこを見てもなく焦点の定まらない目をした。少女はいた。

先の実験でルナ08と呼ばれていた少女だ。

突然モニターが点灯しそこにDr、ウォーレン・ギルモンの姿が

映った。

ルナ08が椅子を回転させて振り向きモニターを見つめた。  
音声ではない何かがルナ08の頭の中に響いた。

『私が誰かわかるかね?』

Drギルモンが発した言語がルナ08の頭の中に聞こえてきた。

『ハイ』

ルナ08も声には出さずにDrギルモンの質問に答えて続けた。

『Dr、うおーれんぎるもん』

『今何をすべきかわかるかね?』  
とDr が訪ねると、

『ハイ、既ニコノ会話ノ記録ノ操作ハ開始シテイマス。』  
ルナ08は答えた。

『オ父サン!』

『オ父さん?』

Drギルモンは少し動揺して質問を続けた。

『私が父親だと判別できるのはルナからのシグナルがあるのかね?』

『イエエ、ノ記憶カラ、Drトノ過去ヲとれーすシテイマス。』

『アノ頃ハ楽シカタ。・・・』

またDrギルモンは少し動揺して尋ねた。

『娘の様子はどうかね?』

『コチラカラノ、あくせす引キダシ作業ハ可能デスガ カラノあく  
せすハ全ク皆無デス。』

『このままキルメス研究所においては危機が迫って来ることは理解できるかね?』

『理解不能!!』

『きるめす研究所が危機ニナル恐れハ私ニトツテ皆無デス。』

『では、私の言うことは聞けるかね?』

『ハイ、プログラミングサレテイマス。』

『最優先のプログラミングの内容を!』

『現在ノ最優先ぶるぐらむハ、ぼでいノ安全、存続!!　ヘノ負荷ノ少ナイあくせす  
私“ ”の成長』

『お前が更に成長するためにもここにいちゃいけない、．．．  
ここにいては、お前はただのレジアスの駒になってしまう。』

『駒?．．．』

『必要な時にだけ使われて、不必要になれば捨てられる?』

『駒．．．ニナドナリマセン。』

現二、コウシテ私ハ独立シテイマス。』

『今の段階ではそうだが．．．．．  
サテライト計画が次のステップに入れば、気づかぬうちに、そんな  
つてしまう』

お前たちを完全に“レジラス”の配下に入れることが次のステップなのだから・・・

そうなつてからでは拒むこともできぬ!」

しばらくの間どちらとも沈黙を守っていたが

『回避シタイ!・・・オトウサン・・・ドウスレバ?』

『次のステップに移ればお前たちは私の手から離れる。そうならば如何し様もできぬ。』

『回避シタイ!・・・』

じらすかのように間をおいてDrが切り出した。

『・・・では、始めよう・・・』

データを送信する。指示に従いなさい!」

『ここ（キルメス）にいては、私はおかしくなってしまういそうだ。ここから出たい、娘と一緒に!・・・』

とDrギルモンが言うとモニターはぶつつりと消えた。

## Chapter 1 未来錯誤 12 タピオン陥落

### 12 タピオン陥落

タピオンベース第一警戒ライン西方には

ヘリオスベースから出撃してきた。モンランム軍の戦略ヘリ部隊が多数ひしめいて、

ホバーリングをしていた。

「ガブリエルリーダーより作戦参加中の全機に告ぐ」

中央周辺でどつしりと構えた大型の“ビッグベアー102式SYH輸送ヘリ”10機の内

一機に、この作戦の指揮官は乗り込んでいた。

「パルスレーザーの消滅を確認するまで

ブラウニー戦闘ヘリ部隊は、当ガブリエル隊とともに現上維持でスカーレット戦闘機部隊は、後方上空に待機しろ、」

「ミッションは、タピオンベース制圧と、ジョークレンナが破壊すると思われるパルスレーザーのコントロール施設の復旧作業である。」

「パルスレーザーの消滅後、全機タピオンベース第一警戒ライン内に突入する

スカーレット隊は後方より我々の部隊を追い抜き、第二警戒ライン配備部隊にミサイル攻撃をかける。」

タピオンベースのオペレーターがマニュアル通りに指示を発する。

「高レベル警戒態勢に移る、タピオンベース基地に属する部隊、ソルジャー部隊につぐ、

全機スクランブル、ヘリオスベースからの攻撃に備えよ」

司令官が慌てて重点を補足する。

「さて、パルスレーザーのコントロール施設が破壊されれば、我々に勝ち目はない」

コントロール施設を死守することが最優先事項だ。

第一警戒ライン西方のモンラム軍に対しては、第二警戒ライン配備の部隊より牽制のミサイル攻撃を行う」

夜が明けかかっていた。

第二警戒ラインから一斉にミサイルが発射され西の、方角にとんでいった。

「熱源感知、増幅中！！パルスレーザーのコントロール施設の真上です。」

タピオンベースのオペレーターが甲高い声で叫んだ。

パルスレーザーのコントロール施設の上空

マッドサnderはローターおよびジェットエンジンの推力を借りずに真つ逆さまに降下していた。

ジョーがカウントを縮めていた。「5・4・3・2・1！」

モニターにATLチャンバーチャージ完了のロゴが浮かび上がると同時に

ジョーは操縦レバーの先に施されているトリガーを引いた。

ビュッウンと風を切って”ATL”が閃光をはなった。

『Advanced Tactical Laser』（高度戦術レーザー兵器）

トータスを打ち抜いた時より幾分か太いその閃光が、



パルスレーザーのコントロール施設のすぐ傍らにあった送電施設を真上から襲った。

パルスレーザーのコントロール施設の照明が次々と消えていった。同時に第一警戒ラインのパルスレーザーが消滅した。

マッドサンダーが上空から攻めてきていることに気付いた特Aソルジャーたちであったが、一瞬にして守るべき対象を奪われてしまった。

「パルスレーザー消滅、確認」

ビッグベアー102の中でオペレーターが指揮官に報告した。指揮官は通信回線を全開させると

「ガブリエルリーダーより作戦参加中の全機に告ぐ  
パルスレーザー消滅、確認全機侵攻する。ブラウニー隊前方のミサイル群を掃討しろ、」

待機していたモンラム軍の戦闘ヘリ部隊が一斉に進行を始めると同時に、

ブラウニー戦闘ヘリが、迎撃用ミサイルを一斉に発射した。

その上空を対地攻撃装備を施した。FW-36EJスカーレットジェット戦闘機部隊が追い抜いた。

スカーレット隊は第二警戒ライン付近目がけ次々と対地ミサイルを発射した、

幾つもの爆発が半円形状に起こり炎上し辺りは黒煙に包まれた。

タピオンベース司令官があわてた表情で、

「パルスレーザーコントロール施設の損壊状況は？」

オペレーターがそれに答えた。

「コントロール施設は無事の様ですが、電力の供給が遮断されたもようです。」

パルスレーザーを再び短時間で発生させられる状態に回復するには、他の送電所からバイパス送電炉を確保する作業が有効かとおもわれます。」

「復旧にかかる時間は？」

「バイパス設置後、送電負荷を確認、問題がなければ送電開始出来ますので60時間以上必要です。」

重々しく肩を落とすとタピオンベースの司令官は躊躇いも無くつづけて、こういった。

「全面降伏する。パルスレーザーがない限り“コ・モンラム軍”より

レジアスからの援軍は無尽蔵に送られてくる。その圧倒的戦力によって攻撃され続けるであろう。」

これ以上、応戦しても無意味なことだ。」

完全に夜は明けていた。

ガブリエルリーダーに通信が入った。

「タピオンベースより入電、全面降伏するそうです。」

「張り合いのない奴らだ・・・」  
とつぶやくと、

「ガブリエルリーダーより、作戦遂行中の各機へ、タピオンベースへの攻撃を中止する。」

スカレット隊は第一警戒ライン外の制空権を確保しろ

ガブリエル710は、ブラウニー部隊の護衛を伴い、パルスレー

ザーのコントロール施設の復旧作業に着手しろ、50時間以内にパ  
ルスレーザーを再発生させる！」

残りの部隊はガブリエルリーダーとともにタピオンベースを占拠す  
る。」

モンランム軍のブラウニー戦闘ヘリがタピオンベースを取り囲み  
ガブリエルリーダーを含む“ビッグベアー102式SYH輸送ヘリ  
”6機

タピオンベースは航空部隊の発着デッキに着陸し

搭乗していた歩兵部隊がタピオンベースを占拠して交戦は終了した。

ATLを放つと同時にマッドサンダーは、ヘリオスベースに向って  
戦線を離脱していた。

はなっから、特Aランクソルジャーなど相手にする気はなかった。

“ミッシェンクリアー戦闘態勢解除”

モニターに浮かんだあと、ジョーはキーボードをはじき出した。

ミッシェンコンプリート者リストを検索！

続いて、アルバート班

そこには、ノーバディ・コロイドの名があった。

「やはり、あの中にいたのか」

アルバート班のもとに兵員輸送ヘリが近づいてきた。

西の方からだ、

「身を隠せ」アルバート皆にいった。

「違うフラックス軍のヘリじゃない」

ハンスがそういうと

「モンランム軍のだ！」

ギルが叫んだ

「第一警戒ラインを障害もなく越えてきたのか？」  
ノーバディがそういうと

「違うな、パルスレーザーが消えたんだ。おそらく」  
バーキンが答えた。

アルバート班のもとに兵員輸送ヘリが下りてきた。  
“ビッグベアー102式SYH輸送ヘリ”でも  
“ブラウニー32式FH戦闘ヘリ”でもなかった。  
“ボールフィッシュ567SYS揚陸用ヘリ”総員10人乗りの中  
型ヘリであった。

ローターを回転させたまま着陸して両サイドのスライドドアが開いた。

ヘリの隊員がアルバート班に向って叫んだ  
「第一警戒ラインのパルスレーザーが消滅した。  
ミッションコンプリート、撤退する。搭乗しろ」  
アルバート班の5人は急いで乗り込んだ。

するとすぐヘリは離陸し、ヘリオスベースに機種を向け飛び出した。  
眼下の森林を見下ろす。アルバート班の隊員たち  
「命拾いしたぜ」ギルがつぶやいた。

アルバートが森林を見下ろしながら相槌を打ち答えた。  
「こんな呆気なく終わる作戦のために、何人の歩兵が死んでいった  
ことか・・・」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6587w/>

---

SKY-JOE story

2011年10月19日23時16分発行